

つれづれ
けんちく
草

7月の末にかかってきた一本の電話に始まる。「加茂さんですか？〇〇です。」

仮に、Aさん、としよう・・・誰だかわからない。口調から察するに、なんだか偉い人のような気がする。「毎日暑いですね。今度ビールでも飲みに行きませんか。」最近、物忘れが激しい私。はあ、はい、と会話をつなげて、すみません、今、打ち合わせ中なので、と電話を切った。

翌朝、またAさんから電話がかかってきた。「今日は仕事ですか？」平日なんだから、そりゃそうだ。そうです。と答えると、「わかりました、じゃあ結構です。」すぐにまたかかってきた。すみません、8月は忙しくて、ちょっと難しいです。とビールのお誘いは、やんわりお断りした。しかし、何度もAさんから電話がかかってくるので話をしているうちに、リタイアした人だということがわかってきた。「もう毎日、暇で暇で・・・。」

——暇つぶしに電話してること？

社外に広いネットワークを持つている方々に問いかけて、どうやら15年前に某市で局長をしていた人らしいことがわかった。私用携帯電話ではなく、社用の携帯電話にかかってくるということは、私の名刺を見ているのだろう。持っている名刺に順番に電話をかけているのだろうか。次にかかってきたら、何と対応したらいいのだろうか。家族はどうされているのだろう。

「ご家族はどうされているのですか？」
「いやー、一人暮らしです。」お友だちはいらっしやらないのですか？
「いないですわねー。仕事していた人にも連絡とらないし。天涯孤独で。一日中暇なんですよ。」

どうしよう。このままじゃ、一人暮らしのAさんは、よくない状況に至ってもおかしくない。そうだ、お子さんの職場を聞いてみよう。職場に電話したら、つながるかもしれない。父親の状況を伝えればいい。

「お子さんは？」
「いないんですよ。」
「奥様は？」
「もういなくて。」
「家族の線は潰えた。出かけた方がいいですよ。散歩とか。」
「いや、でも暑いじゃないですか。」
「そうだ。外は38度だ。そうですね、無理に出かけなくていいです、暑いですから。」
「暑いですよー。」
「これはどうしたものか。」

「この間、電話した後ね、ビールを買って行って、ビール飲んじゃった。」
「ダメですよ。昼間からビールを飲むと、昼夜が逆転します。すると体が弱っていきます。」
「そうですね。」

「あれから、ビールをやめて散歩に行きました。」
「それは素晴らしいですね。歩くのはいいことです。・・・何か趣味はないのですか？」
「ないですねー。」
「趣味と友だちを作らなきゃダメです。」
「そうですねー。」
「料理はしないのですか？」
「料理なんて、女の人がやるもんでしょ。」
「何言ってるんですか。料理は生きていくために必要な技術です。一人暮らしなんだから、自分で料理できるようにやらなきゃダメです。男性だけの初心者向けの教室が流行ってます。行ったら友だちもできます。」
「そうですね。」
「早速、電話番号を調べた。」

「料理教室、調べましたか？」
「いや、まだ。」
「じゃあ、ここに電話してください。男性だけの初心者料理教室です。」
「・・・はい。」

「電話しました。いつでも来ていいって。」

「じゃあ、行ってください。行って、友だちを作ってください。」

「料理教室に行ってきました。」
「一歩踏み出せましたね。何を作ったんですか？」
「いや、ちょっとしたもんですけれど。」
「友だちはできましたか？」
「いや、一回じゃできないね。」
「続けて行かなきゃダメです。週に一回が無理でも、月に一回とか。いつか友だちを作ってください。教室で作った料理は家でも作りましたか？」
「いや、それは。」
「一人暮らしなんですから、一日一回でもいいから作れるようになっていかないと。」

「家でメシ作りました。」
「それは素晴らしいですね。何を作ったんですか？」
「湯豆腐です。まあ、味はアレですけど。」
「いいじゃないですか。友だちができたなら、家で一緒に作って食べたらいんですよ。」

「料理教室、続けて行くことになりました。」
「それはいいですね。ずっと通っていると、友だちもできますよ。」
「そうですね。」
お付き合いできるのはここまでか。そろそろ私はフェイドアウト。しかし、これでよかったのか、最初から話などしない方がよかったのか、未だにわからない。嗚呼、高齢社会。明日は我が身。友人を大切にしよう、心から思った。

かも・みどり

京都大学大学院

工学研究科建築学専攻博士課程修了

博士(工学)・一級建築士

(一社)京都府建築士会代議員

大阪ガス株・エネルギー・文化研究所 主席研究員

神戸松陰女子学院大学、大阪商業大学 非常勤講師